

所属	国際交流研究科 国際交流専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	張 茜	指導教員	飛田 満

論文題目	世界遺産富士山におけるエコツーリズムの現状と課題
------	--------------------------

本文概要

2013年6月、第37回世界遺産委員会において、「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」の名称で、富士山が世界文化遺産に登録された。しかし、近年観光客の入込、山麓の開発、過剰利用、ごみ捨てなど、多くの課題が現れてきた。世界遺産登録は、富士山に利益と知名度をもたらす一方で、観光開発による自然や伝統文化の資源喪失や、観光客による心無い自然採集や建造物への損傷など、地域に様々な悪影響をもたらしている。もちろん、観光産業の発展は当該地域の経済成長につながり、地域を振興することは望ましいが、観光産業が過度に発展した結果、その地域の環境に大きな負荷をかける恐れがある。そのため、持続可能な観光形態となる新しいツーリズムの導入が不可欠である。

日本では、1991年にエコツーリズムが登場し、2003年に「エコツーリズム推進会議」が設置され、それを機にエコツーリズムは徐々に日本中に浸透してきた。この浸透の理由としては、地方都市がおかれた社会環境やバブル経済の崩壊、人々の観光ニーズの変化等が挙げられる。そこで本論文では、世界遺産に登録され、多くの観光客が訪れる富士山を事例として、所謂エコツーリズムの取り組みについて考察し、これまでのツーリズム（マスツーリズム）とは異なる新たな観光形態としてのエコツーリズムの推進をめぐる諸課題について検討する。

第一章「エコツーリズムとは何か」では、エコツーリズムの基本的概念を明らかにし、さらにエコツーリズム推進法と推進モデル地区の分析を行うことで、まずエコツーリズムの課題を洗い出す。

第二章「富士山地域の実態」では、富士山が世界文化遺産に登録されるまでの道のりと、富士山地域の自然環境、歴史と文化、及び富士山地域が抱える課題とその対策について考察する。主にトイレ整備、ごみ捨てルールの設定と強化、外来種および野生動物の影響低減、来訪者制限、開発進展の抑制と景観保全の6つの対策が実施されていることを挙げる。

第三章「富士山地域におけるエコツーリズムの取り組み」では、主体となっている推進団体（富士山青木ヶ原樹海等エコツアーガイドライン推進協議会、富士山北麓エコツーリズム推進協議会、山中湖村エコツーリズム協会など）の取り組みを取り上げ、そこでなお残る3つの課題（観光客数の増加、経済的効果との矛盾、自然環境への影響）とそれに対する提案を試みる。具体的には第一に、富士山地域における観光客の集中をできるだけ防ぎ、環境への影響を最小限に抑えた場所で、祭りやイベントを通じて、エコツアーを実施すること、第二に、エコツアー料金や公的補助金を上げること、第三に、交通量のコントロールできる交通手段の導入と、飲食店の食品廃棄物に関しての環境負荷軽減の取り組みと、ツアー中のごみ処理の取り組みを提案する。

第四章「持続可能な観光開発の課題に対する提言」では、環境保全と観光振興の両立、人材育成制度の導入、環境教育の普及という3つの観点から、持続可能な観光開発の一般的課題を明らかにし、富士山のみならず日本全体のエコツーリズムに対する提言をおこなう。それはまとめて言えば、エコツーリズムは地域の観光資源を利用し、地域振興策として経済的効果は期待できるが、環境に影響を与える観光であることを認識しなければ、エコツーリズムの本旨から逸れる可能性が高い。そのためエコツーリズムを環境保全の視点から見るのが重要である。またエコツアーガイドであっても、地域コーディネーターであっても、エコツーリズムの重要な一環として早い段階から育成することが望ましい。